

# 香港日本人学校の勤務を終えて

## —日本では経験できない苦労と感動の日々—

前香港日本人学校中学部教諭  
長沼町立中央長沼中学校教諭 芹川陽子

### 1. はじめに

2003年4月から2006年3月まで、香港日本人学校に派遣させていただき、この3月に3年間の勤務を終え帰国した。日本と違った環境での仕事や生活に戸惑いを感じ、やり場のないストレスと闘いながらはじまった私の海外勤務であった。けれど、今まで目にする事のなかった『ひと・もの・こと』と出会い、多くのことを学ばせてもらうことができ、自分自身の人生観に変化を感じた。『やれるときに、やれることを、やれるだけ』…この思いを確信して帰国することができた。これからも、この3年間の経験を生かして、家族に、日本に、世界に心を向けて生活していきたいと考える。

### 2. 香港の教育制度について

香港の教育制度は、大学入学までにいくつかの試験を受けなければならない。大学への進学率は約20%であり、最終的に大学まで進学することは難関であるといえる。関係機関が許可すれば、最大で2学年上にとび級が可能である。

幼稚園は基本的に3歳～6歳の年齢が所属する。ほとんどが私立の幼稚園である。一部政府管轄の幼稚園もある。

中学校への入学はSSPA（中学学位分配弁法）によって通学する中学校が決定する。SSPAは、小学校在学中のテスト結果、課外活動などコンピュータに記録された個人データに基づいて行われる。コンピュータは、児童から事前に提出されている希望中学校区に基づいて、ランダムに振り分ける。児童は、振り分けられた中学校の面接を受け、合格すればその中学の生徒になることができる。面接にて不合格になった児童は、違う中学校の面接試験を受けなければならない。

もちろん、F1～F3とよばれる中学校課程は日本と同様に義務教育であるため、最終的には必ずどこかの中学校に入学することができるようである。香港の公立中学校は、学校のレベルにもばらつきがある。そのために、人気中学校の公募倍率は10倍を超えることも少なくない。一部の保護者が子どもを有名中学校に入学させるため、目標の学校がある学区に転居することもめずらしくない。公立中学校進学の時点で進学競争が始まっているともいえる。

F1（13歳）～F3（15歳）にJSEA（中四学位分配弁法）を受けなければならない。内容は面接試験など、SSPAとほとんど同じであるが、中学校をかえることはできない。進学率でいえば約90%の生徒がF4に進む。F3までの授業料は無料であるが、F4とF5は、それぞれ年間5,000\$ほどかかる。F4へ進まなかった生徒は「専業教育」とよばれる2年間の専門課程がある学校に進むことができる。学校はデザイン・ホテル・機械などを学ぶ「香港専業教育学院」と、会計・企業経済などを学ぶ「工商資訊学院」の2つである。F4や専業教育の学校にも進まなかった生徒は社会人となる。

### 3. 香港の言語環境について

香港政府は、1997年の香港の中国返還を期に、母語（広東語）教育政策を打ち出した。1998年には、10年以内にすべての学校・学年において「広東語・中国語（北京語）・英語」の授業を必修とし、この3言語を使いこなせる人材を養成すると定める「マルチ言語政策」を打ち出した。期限となる2008年まで2年を残すところであるが、新聞報道などによると、すでに約80%の学校でこの3言語が指導されているという。この「マルチ言語政策」が成功に向かうのかどうかについては、今しばらく時を待たねばならないが、香港の外国語教育が大きく変化していることはまちがいない。

香港の教育界にとって、母語（広東語／中国語）重視への変更は非常に大きなものになるはずであった。それま



で香港の大部分の中学（日本と異なり、香港では中学校と高校は「中学」として一つにまとめられている）では英語で授業が行われていた。この政策によって教師たちは広東語での授業に転換しなければならなかったのであるが、これはむしろスムーズに移行したようである。というのも香港人教師すべてが英語に堪能であったわけではなく、また生徒も英語による授業を理解するのは大変だったようで、実際ほとんどの中学では程度の差はあれ、英語と広東語が混在した授業（たとえそれが英語の授業であっても）行われていたからである。そのような現状であったことから、この母語への転換により、各教科の生徒の理解度は大きく伸びることになった。

インターナショナル校を除くと、香港は2種類の中学がある。一つは広東語で授業を行う「中文中学」、もう一つは英語で授業を行う「英文中学」である。実は返還後はすべて公立中学が「中文中学」になるはずであった。しかし政府は「英文中学」も114校残したのである。イギリス統治下の香港では、いうまでもなく英語はステータスシンボルであったし、それは今でもまったく変わっていない。保護者は子どもに「英文中学」に入学させるために奔走、熾烈な受験戦争が始まった。

## 4. 香港日本人学校

日本国政府の海外子女教育施設に基づき、香港に在住する邦人の総意によって設置された教育施設であると同時に、香港政府によって昭和41年5月に正式許可された私立学校である。

香港島と本土側に小学校が1校ずつ、そして香港島に中学校が1校設けられており、三校すべてを合わせると約千七百人の世界で三番目に大きい規模の日本人学校である。つまり香港にはそれだけたくさんの日本人が住んでいるということである。中学部は山の中腹で香港の中でも比較的静かな場所にある。近くにはたくさんの学校が集まっており、中国系のインターナショナルスクールやイギリス系の学校と隣り合わせていて、さしずめ文教地区といった感じである。校舎は八階建てで設備も充実しており、各地の日本人学校の中でも恵まれた環境にある。

しかし、土地の狭い香港の宿命（？）かもしれないが、唯一の欠点はグラウンドがないことである。一年生から三年生まで約350人の生徒が通っているが、体育館を含めてバスケットボールのコートがかろうじて一面とれるスペースが3カ所しかない。生徒たちは家に帰っても、思い切り体を動かすことのできる場所が周辺に少ないため、学校でそれを提供したいところだが、休み時間にはそれぞれの場所で人があふれかえっているような状態である。

また全教室にクーラーが設備されていて、日本から考えるとうらやましいようだが、常にクーラーをつけていないと湿気のために掲示物の紙がフニャフニャになる。教室の窓からは、立ち並び高層ビル群の間に海が見える。積み荷とともにさまざまな夢を満載した船が行き来した海、世界中の国と国とを結んできた香（かく）わしい港、香港。現在も香港には名所や観光スポットがほとんどないにもかかわらず、年間一千万人以上の観光客が訪れる。



## 5. 家庭科教育の実践報告(現地教育事情等に関する調査・研究最終報告書より)

### (1) 調査・研究のねらい

今の生活環境の中で、食生活をめぐる問題を少しでも解決していくために、香港日本人学校中学部の生徒には授業の中で、香港の中学校にはあらためて依頼し、食品の選択に対する考え方や食品添加物のリスク（危険性）、遺伝子組み換え食品に対する考え方をアンケート調査し、日本の中学生と香港の中学生の調査結果を比較検討し、その内容を明らかにし還元することによって、今後の家庭科教育に生かしていきたいと考えた。



### (2) 調査・研究の結果(概要)

香港の3つの中学校（①香港宣基中学校②香港港島民生書院③香港培僑中学校）に訪問し、それぞれの学校の経営方針に特徴があることが確認できた。生徒の生活環境に重点をおきながら、質問をなげかけてみた中で、家庭科という単独の教科を持たない香港では、食品添加物や残留農薬、そして遺伝子の組み換え食品などの食品公害に対する意識が低いことが分かった。

香港での「食」の環境としては、街市（市場）や現地系スーパーの

店先に並んでいる中国野菜（特に菜物）には、目に見えないが日本の10倍以上の残留農薬があることも考えられたり、鮮やかな色の人工着色された店先の食材を見ると、食品添加物を長期間とり続けたり、数種類のを一度にとった場合の体内での作用は完全に明らかになっているわけではないことを想起させ、「食の安全性」について大きな疑問が残された。

このアンケートの取り組みによって、興味・関心づけられた「食品公害」に対する意識をさらに高めるために、アンケートの結果内容を伝えるとともに、アンケート内容に理解しやすい解答をつける形をとりフィールドバックをした。（内容は以下の通り）

◎食品添加物とは食品衛生法で食品表示基準が定められており、食品の名称・製造年月日・製造者の名称、所在地、または食品の種類によっては使用した原材料名や食品添加物の表示が義務づけられている。

◎病気に強いトマトをつくるために、ある植物から病気に強い性質の遺伝子だけを取り出して、トマトの細胞に入れることで病気に強い性質のトマトをつくることことができる。

◎殺虫作用をもつ遺伝子を組み込むことによって、殺虫剤の散布なしで害虫の被害をなくすことができる。

◎有機農産物とは、たい肥などによる土づくり、適切な昨期の選択、作物の組み合わせなどに重点をおいて栽培された農作物をさし、原則として化学肥料や科学合成土壌改良資材を使用できない。

◎中国産冷凍ホウレン草の一部から、農薬の成分であるクロルピリホス（防虫用の農薬）が最大で基準値の1.2倍検出された。クロルピリホスは一定量以上摂取すると、けいれんやめまい吐き気などをよおす。

◎日本産ウナギでは、地表水に含まれる雑菌や有害物を防ぐため、地下60mの深い地下水を使っているが、中国では河川の水をそのまま使っている。

◎水俣病とは、工場排水に含まれたメチル水銀によって汚染された魚介類を食べたことによる水銀中毒症。おもに脳の中樞神経の末梢神経が侵される。1958年、熊本県水俣湾を中心に発生。

2つの国の中学生のアンケート結果を比較検討したものを確認した日本人学校の生徒たちは、予想以上の反応を示した。ハムの色素に使用されている亜硝酸塩は、食物に含まれるアミンとの反応により発ガン物質（ニトロソファミン）が生成されることを自ら調べて授業で発表する場面が用意された。調理実習では、香港で売られている菜物野菜には、多量の残留農薬があるから、「流水でしっかり洗い落とす」という意識をもって取り組めるようになった。

以下、現地校での取材内容より

### ①香港培僑中学校

香港で唯一、寮施設を完備している学校として、遠方からの進学者の多い中学校である。学校長の説明では中学校1年～中学校7年まで（義務教育は中学校3年まで）の基礎基本の力をしっかりと養うシステムが、香港の中学校を発展させてきた大きな要因だということであった。

この中学校の課程配置（カリキュラム）の中に家庭科という教科は入っていない。日本の10倍以上といわれている「残留農薬」の被害や、食品添加物などによる食品公害問題について学ぶのは、通識科（常識科）という教科に盛り込まれているという説明であった。

しかし、現状としては残留農薬によって一年間に数名の死者が出ていることや、香港市街地の店先に多量の人工着色料使用と思われる色鮮やかな菓子類や、屋外にぶらさがった豚肉の大きなかたまりなどを見るにつけ、ソルビン酸（保存料）と亜硝酸塩（発色剤）を一緒に摂取した際の発ガン性などの知識を得、対策をこうじる日は遠いと感じた。

### ②香港港島民生書院

1990年に開校し、比較的新しく政府からの多額な補助金を得ており優秀な生徒が揃っているのが特徴である。「成長教育科」という学科があり、道徳心、礼儀作法、性教育、自己精神管理、キャリア教育などを専門的に学んでいる。日本の学活と道徳にあたるものであるが、その特設教室（スペース）は、「祈りの場」として多くの生徒が活用していたり、生徒専用のカウンセリングの場としての役割も果たし、生徒の心のケアの充実度の高さが感じられ、学校全体に落ち着きを醸し出すことに大きく関与しているように思われた。

香港の教育界をリードしている指導者が集まっているこの学校は、経済的レベルの高い家庭の子が多く、保護者の期待度も高いことが理解できる。学校側としても、英語教育に重点を置いたり、ITを導入して積極的に活用をはかるなど、様々な趣向をこらして生徒を集め、日本より厳しい競争が展開されている香港の教育制度の中で進学実

績を上げていくことが一番の保護者のニーズであるとし、それには的確に対応しているようである。

取り立てての「家庭科」内容の教科は設けられていないが、理科系の教科の中に食品公害に関する学習内容や有機栽培に近い学習内容を盛り込んでいた。しかし、このような学習内容の取り組みは日が浅いため、各家庭での「食の安全管理」を考えた場合、アマさん（お手伝いさん）が調理をする際に、野菜の農薬をしっかりと洗い流さず（落とさず）に使用しているのが現状である。

### ③香港宣基中学校

学習意欲が高く、集団としてのまとまりがある中学校という印象があった。それぞれの生徒を取り巻く環境はとても安定しており、教育熱心な環境の中で生徒への心がけ（声かけ）がよい形で行われていると推察された。課程配置（カリキュラム）の中には、宗教（カトリック）があり生徒も「宗教の時間が好き」と答えていた背景には、人としての大切な「もの」「こと」がしっかりと定着している様子がうかがえた。

反抗期を迎えている年代で、「親の教育熱」に対し、それを疎ましく思っている生徒も存在したが、基本的にはどの子も親思い優しさをもっており、とても勤勉であると感じた。香港人向けの塾もあるらしいが、90%以上の生徒は塾には通っておらず、自宅で学習するというスタイルで取り組んでいるようである。家庭での学習時間は、平均して6～7時間といったところである。自ら学ぶ力をもっているのか、学習レベルは非常に高い。

日本の学校に対して、とても興味・関心を抱いており、日本人学校で一緒に学ぶ機会を与えてほしいという希望を強くもっていたのが印象的であった。将来は日本で学びたい、活躍をしたいという願いをもって学習に励んでいる生徒もいたようである。学校自体が、国際理解教育についてとても熱心であり、日本に対してとても友好的であり、日本の食文化や食の安全性に対しても、「意欲的に知識を取り入れたい」という生徒の思いが伝わってきた。

## 6. 香港における保護者の願いや思いについて

保護者の皆さんは、子どもたちが心豊かに育つことを何よりもの願いとしており、国際社会に生きるにおいて、表現力を身につけ誰とでも素敵に関わることができ、生きる力を強く学び取ってほしいということがアンケートなど（生活面）から上げられるが、学習面では子どもの頑張りをはめてのばしてあげたいと思いつつも、嫌がられるほど勉強することを強要してしまい、意欲を損なわせてしまうことにつながっているような現実があるようだ。

塾に拘束されている時間が長く（宿題を含む）、寝不足が続く中で真の力が発揮されていないと思われる生徒が多くみられる。「学級通信を心待ちにして楽しく読ませてもらっている。」という背景には、親子の会話が無く、学校での出来事を学級通信を通して知るといふ家庭も少なくない。学校と塾でいっぱいになったスケジュールをこなし、家庭に帰って口を開く元気も出ない中、生きる力を家庭で育成することは困難という問題を抱えている。日本に帰国してから、しっかりと学習（受験）や環境についていくことができるだろうかという不安を抱えながら、現状としては、学習能力のアップを塾に依存しているといったところである。塾依存型の発想を転換させていくために、今後の日本人学校のカリキュラムを含めた姿勢を改善・進化させていく必要性を感じた。

「我が子への思いを手紙に託してみませんか」と、学級通信を通して投げかけてみた。各家庭に依頼をする際に、『子どもたちに手紙を書くこのような機会を利用して、必要以上のアドバイスや忠告をしてしまうケースがあります。心からお願いしたいことは、たとえ大変必要なものに思われる場合でも、この手紙をお説教の道具として利用することは決してしないようにしていただきたい。』という内容を伝えた。

保護者から、自分たちにとって息子（娘）がどれほど大切であるか、今まで意識的あるいは無意識的に傷つけてしまったことに対する後悔や謝りの言葉、自分たちが「一致した家族」をどれほど望んでいるか、今までしてくれた子どもからの協力や努力に対してどれほど感謝しているかという内容の手紙が回収された。

愛情溢れる手紙の数々に宛名を書き、生徒本人に渡るように投函した。本人たちが受け取ったあたりから、一人一人の学級での様子に変化が見られるようになっていった。「家族の中で自分の存在がどれほど大切にされているか実感できた。」「親から、これほど愛されていたとは知らなかった。」「もっともっと今まで以上に家族の中でコミュニケーションしていく必要があると実感した。」という生徒の感想である。

国際社会に出て活躍するにも、まずは「家庭」という基盤がもっとも大切だと再確認できた。学校と家庭・地域との関わりを密にし協力しあうことで成り立つ『教育』を痛感した。

日本人学校の生徒に欠けているものは何か？という自分自身への問いを解決するべく、この取り組みを担当学級の保護者の協力を得て実施するにあたった。一人一人の生徒が、香港での体験を生かして帰国後に健全なる精神で心豊かに学習したり生活したりできることを願いながら。



## 7. 香港での生活を振りかえる

空港から中心部に向かうにつれ、近代的な高層ビルが目立つようになる。その大半は高層住宅で、湿度の高い香港では雲が低い位置にできるため、マンションの上層階は雲の中といった光景も見られる。土地が狭い香港では、建物は上へ上へと空間を広げてきた。その結果、1990年代には30階建てが主流であった住宅は、最近では60階建てが中心となっている。香港の人々が高層階を希望する理由は、まず第一に眺望が挙げられ、次に静かな環境、きれいな空気と続く。確かに高層階より眺める景色は壮観だが、中心部では建物が密集しており、隣の壁しか見えないという場合も少なくない。

街を歩いていると、行き交うトラムや自動車、さまざまな喧噪（けんそう）の中でも気づかぬうちに会話が大声になっていることに驚かされる。そのような音の洪水の中で少しでも安らぎを求めらば、やはり高層ということになるのであろう。また、天気予報の中で毎日の空気汚染指数が発表されていた。

奇妙な形の高層ビル群の間を縫うように露天が四方八方に広がり、幾千万

のネオンに飾られた街を2階建てバスが行き交う香港。歩くのさえ困難な人混みに、まくしたてるような広東語が飛び交うエネルギーで眠らない都市。世界の経済の中核にやって来たと感じた。

香港は、香港島と中国本土の九龍、新界、その他周辺の島々を合わせても東京都の面積の半分。しかし、そこには約700万人の人々が暮らしている。そのうち95%は中国系の人々だが、国際都市の名にふさわしく、街を歩けばたくさんの国々から来ている人々を目にする。1997年に中国に返還される前はイギリス領であったために、街の案内板やレストランのメニューまでほとんどが中国語と英語の二通りで表記されている。

当初、日本の車社会に慣れた私には、自家用車がない生活がすいぶん不便に感じられたが、時間がたつにつれて「そうでもない」と思い始めた。というのは、香港では土地が狭い上に公共の交通機関が発達しており、おまけにその料金がとても安い。生活の強い味方の「ミニバス」はよく利用した。香港では、バスの路線が網の目のように走っており、郊外も含めてバスで行けないところはないといわれている。また、イギリス統治下時代の影響か、ほとんどが2階建てのダブルデッカーとなっていて、2階建てから街並みを見下ろして走る気分はなかなかのものであった。しかし、バスには停留所はあるが時刻表はない。また車内アナウンスもなく、バスに乗って初めての場所を訪ねて行くには、少々の冒険心が必要であった。

気候はというと、亜熱帯気候の香港は5月から雨期に入り、30度を超える暑さの中、湿度95%という日も珍しくない。そのような中でも、比較的すがすがしい朝の公園では、太極拳のゆったりとした動きに身をゆだねる人々の姿が見られた。個人的に、2年半ほど太極拳を習っていたが、3年間の海外生活の健康維持に役立ったと考える。



食の都という顔を持つ香港の豊富な食材の中でも、「亀ゼリー」は夏バテ防止になるという。亀の甲羅の腹側の部分を粉末にしたものや、その他にも漢方薬がたくさん入って真っ黒で口が曲がるほど苦いゼリーに甘いシロップをかけて食べる。香港の人々には、「生かしておいてこそ新鮮」というイメージがあるようで、魚屋では大きな水槽に様々な魚が泳いでいる。特にエビなどは水槽から飛び出して道路で跳ねている姿もしばしば見られた。魚屋で目を引くのは、隅の方の籠に入れられ重なっているカエルだ。カエルは毎日の総菜というよりは少

し高級なようだが、食欲とつながる食材には見えなかった。生きたカメが動き回っており売られていたが、スッポンではなく完全なカメだが、どういうふう食べるのか首をかきあげた。

果物は種類豊富で、日本ではあまり見かけないようなカラフルなものがたくさんある。マンゴー、パイナップルをはじめ果物の王様と呼ばれるドラゴンフルーツやマンゴスチン、ライチ、スターフルーツ、赤紫のドラゴンフルーツなど、日本と比べて驚くほど安く手に入る。楊貴妃が愛したといわれる枝付きライチは格別であった。



SARS～反日デモ～鳥インフルエンザなど、新聞やテレビを通じてみなさんが知ることになる異常事態を身近な体験として持ち帰ることになった。ここでは、一時期、週末毎に中国各地で行われた反日デモについてふれてみたい。香港でも反日デモが行われた。北京や上海、その他の地域とは違って参加した人が暴徒化することはなかったが、約5千人が集まり「日の丸」を燃やしたりする様子もテレビでは中継されていた。

また、新聞各紙もそのニュースを一面トップで取り上げ、私たちを取り巻く状況は決して楽観できるものではなかった。現在、美食や買い物天国と称して、日本から本当にたくさんの人々が香港にやって来るが、そんな観光にやって来る若い人たちにはあまり知られていないが、太平洋戦争中、日本は3年8ヶ月にわたって香港を占領していた。そして歴史の中で日本が他のアジアの国に対して行ったことは、香港でも行われた。九龍にある歴史博物館には「日本軍の香港占領三年八ヶ月」というブースがあり、その占領政策の遺物が凄惨な写真とともに展示されている。日本軍はちょうどクリスマスの日香港に侵略し、その支配下に置いた。その時のことを香港の人々は「ブラック・クリスマス」と呼び、毎年その時期が近づくと新聞やテレビは特集を組んでいる。その意味で、香港の人々も中国本土の人々と同じように日本に対して反日感情があると主張する人もいる。

しかし、香港の人々は基本的には日本人である私たちに親切だと感じた。香港で暮らしていて、日本人だということの不快感を思ったことは一度もない。日本の企業に就職することを望む人は多く、若者の中には、かつての日本がアメリカに対して抱いたある種の憧れを現在の日本に感じている人もたくさんいる。

香港に住んで感じた魅力は、美食でも買い物でもなく、その治安の良さであった。もちろん、香港でも犯罪はあり油断は禁物だが、日本人学校の中学生の子どもたちが塾に通い、夜遅くになっても自分たちで公共の交通機関を利用して帰宅できる国は世界の中でも数が少ないと感じた。国と国との関係は難しいものもあると考えるが、私たち個人のレベルではお互いに歴史を認識しながらも謙虚な気持ちで良い関係をつくっていきたくて強く願った3年間となった。

## 8. 終わりに

これから、私たちの社会は諸外国の人々や文化との接触、交流がますます増加していくと思われる。21世紀の社会を担う今の生徒たちにとっても、好む好まざるに関わらず、こうした世の中に身を置く確率はかなり高いはずである。

その時に日本人として臆することなく、諸外国の人々とつき合える人であってほしいと願う。そのためにもより一層、今以上に国際感覚を磨き、微力ながら世界の一員、アジアの一員であるという意識を大切にしたい。

日本と香港（中国）、それぞれにおいて、歴史的背景を持って発展したものが生活と密接に関わりながら、人々の心の中に存在していることを実感した。寛容と包容力のある人々に触れ、自分の固定された考え方をかえるよい転換期になった。

香港ならではの「もの」「こと」にふれることを通して、日本の良さというものを再確認できたように思う。この貴重な体験を、これからの自分自身の歩みに生かしていけるよう努力していきたいと思う。



